

肺炎球菌ワクチンの効果

— 小児用ワクチンと成人用ワクチンの関係 —

笠間市立病院 石塚 恒夫

超高齢社会を迎え肺炎は増加、2011年から脳血管疾患を抑え死因の第三位です。2014年10月より65歳を対象に成人用肺炎球菌ワクチンが定期接種化され、2018年までに65歳以上全員が接種できるよう現在経過措置中です。肺炎球菌は肺炎の最も重要な起因菌であり、厚い膜(莢膜)で覆われ白血球による食食を免れるため重症化しやすいのです(敗血症や髄膜炎など)。莢膜成分由来の成人用ワクチンは、抗体産生を促し肺炎の重症化を防ぎます。莢膜抗原は93種類報告されていますが、重症化を起こしやすい23種類の成分に対応しています。

域では、小児のみならず高齢者の肺炎球菌感染症が激減しました。小児への接種が高齢者への伝播を防ぎ、集団としての免疫を高めたのです。

それなら高齢者への接種は不要とか、高齢者にも小児用ワクチンを打ったほうが良いと思われるかもしれませんが、現実には甘くありません。小児用ワクチンの普及の結果、対応していない種類の肺炎球菌感染症が増加しています。小児用は13種類の抗原を含むよう改良され、高齢者には従来からの成人用が推奨されています。

肺炎球菌ワクチンは肺炎予防に有効ですが、過信は禁物です。菌は唾液の飛沫にのって伝播し、鼻咽頭粘膜に定着します。唾液の誤嚥やインフルエンザ感染による気道粘膜障害をきっかけに、深く侵入し増殖します。手洗い、うがい、口腔ケア、インフルエンザワクチン接種など、多角的対策が必要なのです。

肺炎球菌は乳幼児の敗血症・髄膜炎の起因菌でもあり、2013年4月から小児用ワクチンが定期接種で受けられるようになりました。免疫力不十分な乳幼児では成人ワクチンが効かず、莢膜成分に毒素由来蛋白質を結合させる工夫が必要でした。対応する莢膜成分は小児に重症感染症を起こす7種類でしたが、鼻咽頭粘膜の定着も阻止するほどの効果を示しました。驚いたことに接種が普及した地



笠間の歴史探訪 27

玄勝院の亀井有斐の墓碑

笠間小学校北の枳形の信号を東へ折れ、笠間日動美術館前を経て佐白山麓公園入口を過ぎた先が曹洞宗五台山玄勝院前です。山門をくぐり右手の緩やかな坂道を上り詰めた所に広がる左手の墓碑群の一面に、見事な隸書体で刻まれた亀井有斐と袖子夫人の墓碑が建っています。有斐は幕末から明治三十年代に、笠間の書の世界で令名を馳せた人物です。

文政九年(一八二六)六月、有斐は水戸・城東で米穀商と搾油業を営む栗田雅文の二男として生まれました。実名を直、通称を亨二郎といい、雅号を有斐・竹堂・桂城そして書癡山人を名乗ります。商家ながら、父雅文・長兄恭徳共に漢学や日本の古典に造詣が深く、書を嗜み流麗な作品を残しています。有斐の弟寛は水戸藩彰考館総裁豊田天功に学び、認められて同館に入り、二代藩主徳川光圀が着手した『大日本史』編さん事業の完成に情熱を注ぎました。最終的に寛の死後、養子勤(有斐の三男)が完成させています。寛は明治政府に出仕、明治二十五年(一八九二)に東京帝国大学文科大学(現在の東京大学)国史学科の教授に就任、死の直前に文学博士号を授与されました。

嘉永四年(一八五二)、有斐は笠間城下、大町下の亀井時行家(笹屋)の養子となります。当時、亀井家は現在の常陽銀行笠間支店の位置で呉服商を営み、江戸・日本橋の三井八郎右衛門家とも取引を務めていました。亀井家の家業を継承した有斐は、明治二十八年、六五歳で家業を退き、富士山への道筋に沿った隠居所で書三昧の晩年を過ごし、同三十七年六月一日、七九歳で亡くなりました。

有斐は、楷書・行書・草書・隸書のいずれの書体にも通じていたといわれます。弟栗田寛博士が「仲兄(有斐のこと)書ヲ善クス。尤モ八分ニ長シ、名声遠近ニ課シ」と語るように、有斐はとりわけ隸書体の中の八分隸という書体を得意としました。七七歳の喜寿を機して亀井家の菩提寺玄勝院に建立した墓碑銘が、八分隸の書体を知るのに最適です。碑の裏面に、自分の歩みを略述しています。他にも有斐の書になる碑が各地に建てられています。

(市史研究員 矢口 圭二)



亀井有斐の墓碑 (玄勝院)